

2024年1月30日

2023年度聖路加国際大学大学院看護学研究科修士論文

題目

不登校の経験をもつ人が精神科訪問看護を利用する体験

Experiences of using psychiatric home visit nursing for people who have been truant.

21MN303

氏名 犬童美優

## 論文要旨

【目的】本研究は、過去に不登校かつ精神科訪問看護を利用していた時期があり、現在就学や就労に至った人にとっての精神科訪問看護を利用する体験のプロセスを記述することを目的とした。

【方法】本研究は、過去に不登校を経験し、同時期に精神科訪問看護を利用したことのある人5名を対象とした。不登校の経験をもつ人の精神科訪問看護を利用する体験のプロセスのインタビューデータを元に帰納的に分析し、抽出した概念間の関連を記述するためグラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた。

【結果】分析の結果、1個のコアカテゴリー、14個のカテゴリー、35個のサブカテゴリーが抽出された。不登校の状況に精神科訪問看護を利用する体験の中核は、《徐々に周りの人を信頼し、自分らしい生活を取り戻していく》体験であった。対象者は、【周りの人が離れていき、人の反応に怖さを感じる】体験から他人への不信感を持っていたが、訪問看護師の

【訪問看護師は、面白いしグイグイ来ない人だと感じる】姿勢や〈訪問看護師は、話しを聞いて解決策を一緒に考えてくれる〉体験を通じて、【訪問看護師を徐々に信用できる仲間だと感じる】ようになっていた。加えて、〈訪問看護師に相談したことで、家族が穏やかな顔をしていると感じる〉、【友達付き合いの苦手な部分はあるながらも、友達と交流をするようになる】、〈自分のことが学校や役所に理解してもらえている感覚になる〉といった周りを信頼できるようになり、【周りがしているような生活をやり直したいと感じる】や【自分で出来ることは、自分でやっていく】体験のように自分らしい生活を取り戻していく体験をしていた。

【結論】不登校の時期に精神科訪問看護を利用する体験は、対人関係において安全な感覚を持ち自分らしい生活を取り戻す、レジリエンスが促進される体験であったと考えられた。対象者のレジリエンスを促進する支援として、親の相談相手にもなれるよう支援していくこと、対象者と一緒に解決策を考えること、対象者と訪問看護の間には明確なルール設定をもつこと、自己効力感を持てるよう支援することが重要であると示唆された。